

識別番号	K 3
研究課題	社会正義からグローバル・コンサーンへ
研究代表者	中野晃一（グローバル・コンサーン研究所所長・国際教養学部国際教養学科）
共同研究者	ホアン・アイダル（神学部神学科）、小山英之（神学部神学科）、町野朔（法学研究科法曹養成専攻）、三浦まり（法学部法律学科）、江藤淳一（法学部国際関係法学科）、阿部るり（文学部新聞学科）、幡谷則子（外国語学部イスパニア語学科）、田村梨花（外国語学部ポルトガル語学科）、下川雅嗣（外国語学部国際関係副専攻）、高島亮（外国語学部国際関係副専攻）、（福武慎太郎（外国語学部アジア文化研究室）、村井吉敬（早稲田大学アジア研究所）（以上、グローバル・コンサーン研究所所員）
Summary	The Institute of Global Concern (IGC) was established in April 2010 with a mission to conduct research on a range of issues that threaten the dignity and solidarity of humans from a global perspective, to provide opportunities for the conscientization of students and the public through its research outputs, and to engage in activities with an aim to realize another, better world. We thus hope to renew and build on the traditions of “the Sophia school” that grapples with the real problems of poverty and violence – “with Others” – in difference to the naively “objectivist” and conformist tendencies of mainstream social science today. The IGC was built through the reorganization of the Institute for the Study of Social Justice, which was originally founded in April 1981 and actively engaged in refugee relief efforts. The IGC, thus, continues to oversee the running of the Sophia Relief Service as well.

1. 本研究の目的および背景

本研究所は、これまで社会正義研究所として難民支援研究などの分野において一定の成果を挙げてきたが、当初中心的に活躍していた所員たちが退職していった結果、ややもすると活動理念がぼやけ、またその幅が狭まる側面もあった。そのため、近年大幅な所員の交替と活動内容の刷新を進めてきた。

2010年4月、こうした改革の取組をいっそう進めるとともに、グローバル化する社会のなかで人間の尊厳と連帯をもとめる本研究単位の新たな指針を明確に打ち出すために、本研究所はグローバル・コンサーン研究所（Institute of Global Concern、IGC）として生まれ変わった。

IGCは、①人間の尊厳と連帯を脅かすようなさまざまな問題をグローバルな視点から研究し、②その成果をもって学生や社会に意識化の場を提供し、③さらに変革のための実践を通じて学生、RA/PD、職員などを世界のひとびとの尊厳と連帯を実現する人材に養成する、の3つの活動を有機的に繋げつつ展開することを目的としている。

変動する現代世界の社会正義に関わる問題に取組むという本研究所の姿勢自体に変わりはないものの、IGCでは、従来の社会正義研究所と比して以下の2点を強調している。

①高みに立って施しをするのでも象牙の塔に閉じこもるのでもなく、困窮者たちの主体性

と尊厳にむきあい、人間や共同体相互の連帯をもとめ活動を行う。

②ここにち新自由主義を旗印に日本を含めた先進地域と発展途上地域の双方で貧困や暴力などによる人間性の蹂躪が行われていることを直視し、その解明に努めるとともに、グローバルな視点から対抗の可能性を模索する活動を行う。

2. 研究企画の概要 I（今年度すでに実施したもの）

「社会正義からグローバル・コンサーンへ」を共通テーマに、以下の研究企画を実施した。

①講演会「死刑廃止と修復的司法、全方位で赦しと和解を考える―被害者支援と加害者更生教育」

- ・2010年6月10日（木曜日）17:15-19:00
- ・四谷キャンパス中央図書館9階921教室
- ・講師：李永雨神父（韓国カトリック矯正司牧委員会）
- ・言語：韓国語（逐次通訳あり）
- ・共催：カトリックセンター

[趣旨]

「死刑」という刑罰については、日本では85%を越える人々が支持しているといわれる。他方、隣の韓国では、宗教界の後押しもあり1997年以後、死刑は執行されていない。韓国カトリック矯正司牧委員会は、とりわけ加害者と被害者の両方を橋渡しする創造的な活動で注目されている。つまり一方で死刑囚など更正施設収容者への教誨活動、彼らの社会復帰への手助けを行うと同時に、他方で犯罪被害者のケア、さらに両者の赦しと和解までもめざすという全方位的な働きを繰り返している。韓国カトリック矯正司牧委員会は、坂上香氏の『赦しと和解への旅』を韓国語に出版したり、また犯罪被害者遺族と死刑囚の家族の和解への旅を描いたドキュメンタリー映画『赦し』を製作したりなど啓蒙活動にも力を入れてきました。映画『赦し』の日本語版が女優・竹下景子さんのナレーションにより完成したことを機に韓国カトリック矯正司牧委員会の代表である李永雨（イ・ヨンウ）神父をお招きして、その先進的な取り組みをご紹介いただいた。

②講演会「国籍とは何か―無国籍者の現状と課題―」

- ・2010年8月6日（金曜日）17:00-19:00
- ・四谷キャンパス中央図書館9階921教室
- ・協力：無国籍ネットワーク、日本財団
- ・講師：陳天璽（国立民族博物館准教授）「日本にいる無国籍者の現状と問題」
- ・PNLSC事務局「残留日本人問題～日本人移民の歴史から戦後の国籍回復運動を中心に」

[趣旨]

日本人を両親に持ち、日本で生まれ育った私たちにとって、日本国籍を持っているということは当たり前のことだが、フィリピンをはじめとするアジア地域には日本人でありながらも、日本人として認められない残留日本人が多くいる。国籍とは何か、故国とは何か、そして自分のルーツとは何か。そのような問題について、フィリピン残留日系人の方たちを交えて考察を深めた。

③フィールド・ワーク「大学から路上へ：野宿者と私たちを考える」

- ・7月30日（金曜日）オリエンテーション
- ・7月31日（土曜日）フードバンク訪問・作業参加

- ・ 8 月 1 日（日曜日） 山谷ミニツアー、共同炊事参加（協力：山谷労働者福祉会館）
- ・ 8 月 3 日（火曜日） 山谷夜回り参加（協力：ほしのいえ）
- ・ 8 月 7・8 日（土・日曜日） 山谷夏祭り（協力：山谷夏祭り実行委員会） など

〔趣旨〕

私たちが暮らす社会には、失業や不安定雇用、福祉施策からの排除など、厳しい社会・経済構造を背景に、住まいを失い、駅や公園、河川敷などで野宿して生きる人々がたくさんいる。近年では、派遣切りやワーキングプアという言葉に象徴されるように、若者やこれまで中間層と思われてきた人々にも、貧困の陰がしのびより、彼ら・彼女らもまた、次々と路上に追いやられている。野宿者の問題は、決して他人事ではなく、私たちや、私たちの社会の問題である。そこで今回は、日雇労働者の街・山谷を中心に、野宿の人々や、彼らとともに活動する人々に出会いながら、野宿の問題、貧困の問題について考え行動するきっかけとなるよう企画した。

3. 研究企画の概要Ⅱ（これからの予定）

（1）IGC 発足記念イベントシリーズ

①「NGO の時代は終わったのか？」

（i）ワークショップ「NGO の時代は終わったのかー成熟するアジアの市民社会と日本の NGO の未来」

- ・ 2010 年 11 月 7 日（日曜日） 10:00－16:00 予定
- ・ 共催：アジア文化研究所など

〔趣旨〕

近年、アジアの NGO は、住民の声を代表し社会変革運動の担い手として、政府への政策批判を行う抵抗する団体から政府への政策提言を行う専門家集団として変容、さらには政治的な力を持つ勢力として台頭しているケースもある。また、国境を越えたネットワークを形成し、「北」による「南」の支援という従来の国際協力の枠組みから、「南」による「南」の支援、さらには「南」から「北」へとその活動の可能性を探りつつある。そうしたアジアの NGO ネットワークの変化の中には、自然災害や社会災害を乗り越えた経験、そして民主化を果たした経験を、近隣諸国と共有しようという動きも見られる。アジアの NGO は、その力を確実に伸ばしている。

アジアの NGO の能力向上がみられる中で、日本の国際協力 NGO の意義を問い直す時期にきている。現地で日本人がプロジェクトを実施する意義はあるのか。欧米の国際協力 NGO との戦略の違いは何なのか。社会的起業、そして企業の CSR が注目されるなかで、それらが担えない NGO の特別な役割は何であろうか。アジアにおける NGO の現状を見ながら、日本の国際協力 NGO の現状と今後の新しい役割を考えていきたい。

（ii）ワークショップ「アフリカのいま：カクマキャンプ報告をふまえて（仮題）」

- ・ 2011 年 1 月予定

〔趣旨〕

ソフィア・リリーフ・サービス支援先でもあるケニア・カクマキャンプの訪問報告をふまえて、学外よりアフリカの専門家を講師として招聘し、アフリカの難民問題や学生の支援活動などについて議論を深める。

②「ジェンダーと働くこと（仮題）」

(i) 韓国ドキュメンタリー映画「外泊」上映会＋ミニ講演会

・2010年11月上旬予定

[趣旨]

韓国女性のパワーが感じられ、ジェンダーの視点からも、また非正規労働問題の視点からも、多くの問題を提起する内容のドキュメンタリー映画「外泊」を上映、合わせて韓国の背景説明をおこなうミニ講演会を実施する。

(ii) ミニシンポジウム「日本は女性にとって生きづらい、働きづらい社会か? (仮題)」

・2010年11月下旬予定

[趣旨]

「外泊」上映会での問題提起をうけて、次いで日本社会について考えるミニ・シンポを開催する。

(iii) 座談会「: ワークライフバランスを考える (仮題)」

・2010年12月予定

③「野宿者と私たちを考える (仮題)」

映画『ホームレスと出会う子どもたち』

模擬授業&トーク

・12月上旬(予定)

・講師: 生田武志さん

(2) 第30回国際シンポジウム(国際基督教大学社会科学研究所との共催)

『Japan in Search of Its New Role in World Affairs: Foreign Policy Options Twenty Years after the End of the Cold War』

・2010年11月13日(土曜日)

・国際基督教大学 Dialogue House, Conference Hall

4. 来年度の展望

JCEAO(Jesuit Conference of East Asia and Oceania)においても education with a social dimension というテーマが優先課題の1つとして検討されており、我われはIGCを本学の社会との関わりを体現するような活発なセンターへと発展させていきたいと考えている。2011年度は、自由で開かれたセミナーを開催するなど「社会版カトリックセンター」とも形容できるような研究所として、大学の社会的役割について研究および実践活動を進める計画である。したがって、研究テーマとして education with a social dimension を掲げ、そのもとで、外国人移住者・移住労働者、野宿者、ジェンダー、韓国・自由研究空間「スユ+ノモ」の試みなどをサブ・テーマに研究を進める。